

悪魔の誘い

— 黒部完全航行への執念 —

海老原

博

何の事であろう、悪魔の誘いとは。他の人がどう感じるかは知らないが、私にとっては黒部川は悪魔でしかない。それ故に増々私を虜にする。あの大自然の中を流れ、少しの雨で増水し、鉄砲水になる。まるで天下を取つたように荒れ狂い、人間の弱さをあざ笑っている。この流れを聞いているとまるで“ここを下るつて？” “馬鹿な奴だこの俺に挑戦するとは” “大自然の恐しさを思い知らせてやる”と言っているように感じる。僕はむしろ腹が立つ。どうしても征服しなければならぬ。僕を一度ならず二度までも下る途中で挫折させ、川にボートを浮べることさえ許さなかつた。この屈辱に僕は耐え忍ぶことはできない。むこうが拒めば拒むほど、それだけ闘志がかき立てられ、増々征服欲が湧いてくる。これをやつておかなければ、これから先、敗北を背負つて生きていかなければならぬし、青春を自らの手で放棄することになる。若さとは何であろう。常に戦うことだ。どんな壁があろうとも、それを乗り越えて行くのだ。何回打ちのめされようと、それに立ち向つて行くのだ。征服するまで戦いを止めてはならないのだ。

僕は自分の青春を黒部川に賭けるのだ。否、それ以上に賭けたいのだ。青春とは何かを知りたいのだ。それは理論ではなく、行動としてである。

黒部川を地形的に観てみよう。
北アルプス鷲羽岳に源を発し、立山連峰と後立山

連峰の間を深く浸蝕し、世界的に有名な狭谷を形成して日本海に注ぐ。延長 8.6Km、河川勾配平均 $\frac{1}{40}$ という急流で、年平均降水量 3810mm という多雨地帯を流れ、冬期の積雪量は 5m に達し、水量調整の自然に行なわれる豊かな川である。

この自然条件に着目した電力会社は大正の初期から開発の手を伸ばした。そして昭和 2 年には 54000KW の柳河原発電所が完成、順次上流に向かい昭和 38 年には黒部第四発電所、俗に言われている黒四が完成、この工事は予想をはるかに越えたものであり 7 年もの歳月を要した。この黒四のため、現在では観光開発の手が伸び、観光地黒部と変りつつはあるが、まだまだ自然条件は厳しく、川を下るのには幾多の困難が待ち構えている。

黒部川下りの計画は去る 42 年の夏に計画され上ノ廊下（薬師沢出合～黒四ダム）までを下る。翌 43 年の夏には黒部川の残された下ノ廊下を計画、偵察の折りに関西電力からの圧力により、又警察からの勧告のため、今一度万全を期すために下ノ廊下の偵察に終つた。絶壁よりワイヤー梯子を使って川辺まで降りて水流の状態等を調べ、多くの収穫が得られた。調査の途中でスノーブリッジがくずれ落ち、改めて雪溪の恐ろしさを思い知らされたのである。

44 年には、黒部完全航行を目指した。つまり上ノ廊下、下ノ廊下を一気に下つてしまうことで

ある。偵察も終え、さてあとは出発を待つばかりという時に、東北地方のゲリラ豪雨のために、黒部への道が鎖され、又日電歩道もズタズタになりサポート隊が入れない状態になり中止に終った。

昨年は人災、今年は天災、黒部への道は厳しく遠い。

来年も私はやる。これだけははつきり言える。2年間も黒部一本で頭をうずめてきたのである。初めにも書いたように、もはや私からは一秒たりとも切り離せない。

吉野川トレーニング合宿において装備に関してはまだまだ改良・考察の個所があると思う。

例えばヘルメット、今までののは後頭部の所が無防備であつたし、落ち込んだ時に脱げる危険がある。又ライフジャケットにおいては、今のでも確かでないよりはましであるが、流れのきつい所においては、はなはだ疑問である。

帆布にしろ、本格的な川ではまだまだ練習していないから疑問である。

装備の面では色々あるから後1年間じっくり考え、自分自身納得がいくようにしたい。

又、トレーニングについても考えなければいけないと思う。計画にそつて期間毎にトレーニングをやる。つまり冬は耐寒訓練に重点をおき、春は岩、というように黒部のためのトレーニングという事を明確に打ち出したいと思う。ただ岩を登るだけでなくボートを担ぎながら登る練習をするというようなトレーニングをやつていきたい。

最後に川下りと探検との関係について少し書いてみたい。

まず探検とは何であろう。考えれば考えるほど深いものである。又今まで幾多の人がその人なり

の探検を語つてきた。がいまだ定まつた答はない。しかしあるはずだ。真理はひとつだから。ここで僕が言いたいのは真理を追求し答を出すことではない。とても若輩の私には無理である。それ故探検する姿勢を書いてみる事にする。

探検を志す時の基調となるものは「未知への欲求」これ以外にないと思う。名の通つた探検家でも無名の探検家或は学生探検も皆同じだと思う。もし「未知への欲求」以外の事が基調となつてゐるならば……例えば金のため、宣伝のためなど……それは探検ではなく探検をひとつの商品としてゐると僕は断言する。

だから探検する姿勢は以上述べた意味においては全部一緒なのである。又経過も同じだと思う。ただ違うのは結果だけである。その結果はもはや自分1人の所有ではなく社会の所有になる。その時代によつて価値が決まつてしまう。社会の価値を考えると探検ということは複雑になつてくる。

学生である僕には、探検の基調、或は過程における探検というものをしつかりふまえ、社会の評価というものは二の次としてこれからも進んで行かなければならないと思う。

川下りは社会の評価から見れば探検するという行為(総体的意味において)ではなくなるかも知れない。しかし僕が今やつてゐる川下りは、否むしろ黒部計画は基調及び過程においては探検をやつてゐると胸を張つて言える。

何かまとまりのつかないことを書いてしまつたような気もする。とにかく僕は黒部をやりたい。黒部に何か自分の意義を見い出せる人は、大いに参加してほしいと願うものである。

(経済学部2回生)